菅茶山と中條村

一　茶山と文人サロン「中條」

菅茶山がよく訪れたのが河相君推宅（松風館）と遍照寺（へんじょうじ）である。本題に入る前に、当時の中條について述べてみたい。

『神辺町史』（社会教育課神辺町史刊行係発行）には次のようにある。

元禄十年（一六九七）福山藩四代藩主水野勝種の急死により二歳の勝岑が第五代藩主となるが、元禄十一年（一六九八）に死去し、水野家は断絶となる。元禄十三年（一七〇〇）岡山藩検地で十五万石余の石高とされ、出羽国山形藩松平忠雅が十万石で入封する。この時、福山藩領の五万石が幕府領となる。近隣では、西・東中条村、三谷村が幕府領となる。この村々が福山藩領に復帰するのは、嘉永五年（一八五三）阿部正弘が一万石を加増されたことによる。

幕府領は概ね上下（府中市上下町）の代官所が管していたようであるが、初めは笠岡代官所が後には、龍野、浜田、大森などの代官所も支配していた

幕府領は天領と称し大名領を私領というのに比し、概に名称の上に置いて優位に置かれた。幕府領は租率において総体的に軽かったようである。また、経済面についても緩やかなようで、福山藩は幕末期に倹約令を出し、櫛、笄、簪などの金銀等のものや蛇の目傘の使用を禁じたが、隣接の箱田村ではそのようなことがなかったので婦女子をして羨望せしめたと伝えられている。

番所跡碑　三ツ池堤

黄葉夕陽村舎詩や茶山日記には、度々訪れた近隣の場所や人物、同行した人物や詩友の名前が見受けられる。主なものをあげる。

西・東中條村　河相君推（松風館）、大空上人（遍照寺）、河相子蘭、松井子璐、篁大道、寒水寺、圓通寺、廣山寺
湯田村　乗如上人（寶泉寺）
川北・川南村　風霊上人（光蓮寺）、菅波武十郎（東本陣）、藤井暮庵、西福寺、東福院、龍泉寺、萬念寺
御領村　如實上人（国分寺）、明正寺

中でも黄葉夕陽村舎詩に多く詠まれているのが、先に述べた河相君推（松風館）と大空上人（遍照寺）である。さらには、河相子蘭、松井子璐篁大道などの弟子や詩友がおり、茶山にとって中條はかけがえのない場所であったことが想像できる。中国の歴史や文学に通じていなければならない漢詩が、僧侶や農民（庄屋）など中條の人々に親しまれたということは、当時としては異例の事ではなかったと思われる。つまり、水準の高い教養人たちが住んでいた土地であったことが窺える。

さらには、茶山は訪ねて来る文人たち、西山拙斎、道光上人、頼春水、頼杏坪、姫井仲明、永富充國、佐藤子文、小原業夫などを中條へ案内している。その迎賓館の役割を果たしたのが河相君推の「松風館」であった。彼らは全国の文人たちとも交流があった。この時代、中條に文化の華が開いていたと言える。

(一) 遍照寺と大空上人

『黄葉夕陽村舎詩』中で松風館に次いで多くの詩が詠まれている。遍照寺が七首、住職大空上人に関するものが五首見受けられる。

遍照寺は西中条にある真言宗の寺院で茶山詩にある「黄龍山（おうりゅうざん）」はこの寺の山号である。本堂の前に立つ記念碑の説明文には次のようにある。

黄龍山遍照寺

享禄二年（一五二九）建武の中興で中条村地頭職に深水菖蒲山城主真瀬（さなせ）氏直系の出雲守信正により、現在地に遍照寺が建立される。当初は興福寺と云う。天文七年（一五三八）真瀬氏落去の後再建され遍照寺と号す。初代住職は宥朝上人、以降の上人の上人法印職に就任される方も多し。享保十七年（一七三二）旧本堂が建立される（宥智上人）。以後、約二百七十年聳立す。寛政元年（一七八九）玄道（大空）上人、四十四歳にして亡くなる。菅茶山と親しく交友ありて遍照寺にしばしば来訪す。（後略）

遍照寺への道は、現在は車で楽に登れるが、麓から急な山道を幾たびか折れ曲がりかなり高いところにある。その参道沿いには谷川が流れ、大きな岩や木々が点在する。茶山はこの遍照寺に度々登り大空上人と詩作に耽ったり、吟友達と月見宴を催すなど楽しい時を過ごしている。

大空上人は名を玄道といい、大空はその字である。大空上人についての詳しい資料を管見していない。茶山詩集や茶山日記や「菅茶山と遍照寺及大空上人」（猪原薫一氏、『備後史談第一巻二号』）などから推察すると、生年は延享二年（一七四五）、没年は寛政元年（一七八九）であることが『茶山日記』からわかる。

文化二年（一八〇五）五月十八日　晴
招諸子於西福寺作和歌　祭大空上人十七回忌題往時如夢

また、遍照寺に住すること約二十年、同寺を大了上人に譲り、高野山某寺へ還ったと言われている。茶山との交流は、茶山が遍照寺を訪れる以外にも、安永八年（一七七九）共に西山拙斎（備中鴨方）を訪ねたり、天明四年には、恵充上人（湯田村寶泉寺）と共に重陽の節句（九月九日）に「登高」して詩を詠んでいる。また、天明八年（一七八八）六月六日茶山が宮島への旅に出る際には芦田川畔まで送っている。

大空上人がどのような詩を詠んだかは不明であるが、本堂を見下ろす歴代上人の墓域に一基の墓石がある。そこには「法印玄道」とあり、周囲に次のように印してある。『備後史談第一巻二号』から引用する

僧房寂莫倚雲端　僧房　寂莫（せきばく）として倚雲（きうん）の端
山瘦林疎觀歳闌　山瘦（さんそう）　林疎　歳闌（さいらん）を観る
間座攤書燈火下　間座し　攤書（たんしょ）　燈火の下
五更風雪過窗寒　五更　風雪　窓寒を過る

寂莫　ひっそりとしてもの寂しい、白居易の長恨歌にあり。倚　よりかかる。歳闌　年の暮れ。攤書　書物を開く

（大意）

僧房はひっそりと山にかかる雲にもたれかかるように建っている。この時期になると木々の葉は落ち、山は細り林はまばらになり年の瀬の近いことを知る。静かに座って燈火のもとで書物を開く。気が付くともう五更（午前四時）になって、吹雪が寒々と窓を打っている。

大空上人招魂碑

歴代上人の墓碑

㈡ **河相子蘭**（　　～一八二八）

河相君推の親戚筋にあたる大坊河相家に生まれる。名は國香、字は子蘭、号を靜香、喜多（太）治と称する。豪農で里正。母は松井子璐の実姉。茶山の死の翌年文政十一年没。大坊古墳の上に墓がある。

㈢ **松井子璐**（一七五三～一七八〇）

宝暦三年、西中條高居の大庄屋に生まれる。名は宝、号は春薹、子璐は字。幼児期より学問に親しみ、医学を志していたが、安永九年二十八才の若さで病没。姉が河相子蘭に嫁いでおり、子蘭とは甥と叔父関係にあたる。茶山より五才年少で弟子であり、友人であったのではないだろうか。『黄葉夕陽村舎詩』の中に子璐の名前が見られるが、詩などの作品は管見しない。

㈣ 篁（たかむら）大道　生年、没年とも不明

名を之直、高村を修して篁と称した。字を大道、蘭山と号した。中條出身で神官の子と言われているが詳しくは不明である。詩をよくし、茶山の弟子か友人であろう。

墓は中条八幡宮門前の道路を挟んだ場所に建っている。

篁大道墓碑

河相子蘭墓碑

松井子璐墓碑

二　遍照寺を訪ねたり、中條の詩友と詠んだ詩

㈠ 安永二年～三年（一七七三～四）の作

茶山が京都遊学を繰り返していた頃、松井子璐と河相子蘭も京都に遊学していたと推察される。茶山詩の中に、共に遊んだ詩も見える。

次子璐月夜泛琵琶湖韻　子璐　月夜琵琶湖に泛べるの韻を次ぐ

黄葉夕陽村舎詩　後二―十

天女祠前湖月清　天女祠前　湖月清し
湖心乗月棹空明　湖心　月に乗じて空明に棹をさす
風來波浪生哀響　風来って波浪哀響を生じ
舟在琵琶絃上行　舟は琵琶　絃上に在りて行く

天女祠　天女を祀った祠。空明　すんだ水中に映える月影。

（大意）

良夜の湖に惹かれ、天女祠前を舟で行く。湖の中ほどに出るころには、月がいよいよ澄んで、櫓を操るごとに銀の波がゆれる。ふいに風が起って舷をたたくもの悲しい水音を聞いていると、やがて舟は琵琶の絃の上を奏でながら進んでいるかのようだ。

西中条高居に建つ詩碑

＊　下記の写真は故松井義典氏が高居に建立された詩碑二基。裏面に「安永二年（一七七三年）琵琶湖舟遊京洛清遊の節　菅茶山先生二十六歳　松井子璐二十一歳なり」と刻まれている。

時子璐叔姪東遊

時に子璐　叔姪東遊す　黄葉夕陽村舎詩　集外

村居無伴日相求　村居　伴無く　日に相求む
喜與群賢此宴遊　群賢と與に此れ宴遊するを喜ぶ
繞砌軽煙花影亂　繞砌す　軽煙　花影　乱れる
隔簾古木鳥聲幽　簾を隔つ古木　鳥声　幽なり
大杯令行誰堪罰　大杯を行ら令む　誰が罰に堪えんや
窄韻知難還欲鬮　窄韻の難きを知り　還鬮せんことと欲す
二阮今朝醉何處　二阮　今朝　何処に醉う
春深京洛酒家楼　春深き京洛酒家の楼

群賢　多くの文化人。繞砌　繞はめぐらす、砌は庭、軒下の石畳。窄　せばめる。鬮　くじ（籤）。二阮　竹林の七賢の阮籍と阮咸を子璐と子蘭になぞらえている。

（大意）

田舎住まいは話し合える友人もなく、日々相手を求めている。ところがここ都は文化人も多く、一緒に宴席に遊ぶことができて嬉しい。簾を隔てた庭の古木に囀る鳥の声がかすかに聞こえてくる。宴たけなわにもなれば大杯が回ってくるが、果たして飲み干すことができようか。引き当てた韻字は字数が少なく詩を作るのが難しい。もう一度籤を引くことができないだろうか。二阮（子璐・子蘭）は今日何処で飲んでいるのだろうか。春も深まる京の料亭の離れ座敷あたりだろうか。

(二) 安永七年（一七七八）の作

茶山は永富充國（五島藩儒）、篁大道、松井子璐、河相子蘭、桑田元孝（備後国福田村）と中秋に遍照寺大空上人を訪ねる。この時詠まれた茶山の詩は黄葉夕陽村舎詩には収録されていない。しかし同行者の詩が「岡鶴汀（備中倉敷の人）の遺筐から発見された」と『備後史談十巻八号』で明らかにされた。その詩を取り上げる。

中秋登遍照寺作　篁之直（大道）

檐角雨愈洒　檐角に　雨愈　洒ぐ
病魔秋更存　病魔　秋　更に存す
昨宵看月約　昨宵　看月を約す
今日忘憂樽　今日は憂いを忘れる樽
峰語劚苓客　峰は語る　苓を　劚す客
谷鳴偸栗猿　谷に鳴くは　栗を偸む猿
論詩講殿外　詩を論ずる殿外の講
偏恨晩暉昏　偏に恨む　晩暉の　昏を

檐　ひさし、のき。洒　あらいきよめる。病魔　人体にとりついて病気を起こさせる魔物。樽　酒だる。苓　草の名、みみなぐさ、おちぶれる。劚　切る。殿外　寺院の外。晩暉　夕陽の光。

（大意）

本堂の庇に降る雨が、ますます強くなる。病気が人にとりつくような嫌な秋がやってきた。昨日の夕方、観月会を催そうと相談していたのにこの雨で残念だ。しかし、その憂いを忘れさせる酒樽が準備されている。周りの山々は、落ちぶれて軒先に集うような客だという。谷には猿たちが栗の実を取りにやってきている。集うものが詩を詠ずるのはお寺の外である。残念なことにだんだん暗くなってきた。

中秋登遍照寺作　河（相）子蘭

提筇提燭問林邱　筇を提え　燭を提え　林邱を問う
黯澹高天玉露秋　黯澹たる高天は玉露の秋
萬里雲烟鳴雁過　万里の雲烟　雁は鳴き過ぎる
一支澗道暗泉流　一支の澗道に　泉流は暗し
酒肴誰具知微術　酒肴　誰か知微の術を　具える
賦筆空添希逸愁　賦筆は空しく　逸愁を添うを　希う
環坐通宵聽點滴　環坐して通宵し　點滴を聴く
談論不羨庾公樓　談論　羨ずず　庾公楼

筇　杖。黯澹薄暗くて深い。高天よく澄んだ空。玉露香気と甘味。万里　遠く隔たっていること。知微　目立たないようなおもてなし。賦筆　詩歌をつくる。點滴　雨だれ。庾公楼 晋の庾亮が江洲の鎮であった時建てたものという楼、遍照寺の高殿をなぞらえている。

（大意）

杖をついて、提灯をともし林の中の丘を登ってきた。暗くて深い色の

空は、いい香りがするようだ。辺り一面に雲が立ち込め、雁が鳴きながら飛んでいく。脇を流れる谷川の流れは暗くてよく見えない。観月会のための酒肴の品々も目立たないように準備されている。詩が詠めないようなことにならないことを願うばかりだ。みんな輪になって座り、雨だれの音を聞いて、ワイワイ騒ぎながら小川の辺りの高殿の庇の下で、おしゃべりを楽しんでいる。

同遊する永富充國、菅茶山、桑田元孝の詠んだ詩は、『備後史談第十巻八号』「詩草一葉」に詳しい。

㈢ 天明二年（一七八二）の作

歳杪寄大空師　　歳杪（さいびょう）　大空師に寄せる

黄葉夕陽村舎詩　前一―二十一

荒歳村居事亦紛　　荒歳（こうさい）　村居　事亦紛（ことまたふん）たり
隣閭警盗譟宵分　　隣閭（りんりょ）　盗（とう）を　警（いまし）めて　宵分（しょうぶん）に　譟（さわ）ぐ
遥知姑射峰頭月　　遥（はるか）かに知る　姑射峰（こやほうとう）頭の月
寺寺経聲咽白雲　　寺寺（じじ）の　経声（きょうせい）　白雲（はくうん）に　咽（むせ）ぶ

歳杪　年の暮れ。大空師　大空上人。荒歳　不作の年。閭　村里。紛　まぜかえす、物騒な。宵分　夜半。譟ぐ　騒ぐ。姑射峰　仙人の住むという峰、ここでは高野山。

（大意）

今年は飢饉で村里は物騒なことだ。隣村では泥棒の警戒に出てこの夜中に騒いでいる。はるか彼方の姑射峰の上にはかかわりなげに月がかかっている。寺々の読経の声が白雲にむせぶように聞こえてくる。

詩碑「歳杪寄大空師」

＊詩碑裏面に「黄龍山遍照寺釈秀傳老師秘蔵書」とあり、この詩は一幅の軸として遍照寺に遺されている。

空上人見訪　　黄葉夕陽村舎詩　前一―十六

惠休才思人誦　　惠休の才　思人　誦（しょう）す
支遁山心自知　　支遁（しとん）の山心　自（おのず）から知る
流水孤雲觀世　　流水　孤雲　世を観る
鳥言樵語參詩　　鳥言（ちょうげん）　樵語（しょうご）　詩に　参（くわ）わる

空上人　大空上人。　惠休　宋の高僧、沙門惠休。　思　したう。
支遁　晋の高僧、支研山に隠修する。孤雲　一片の流れ雲。　樵語　きこりの話し言葉。

（大意）

大空上人とお会いするにつけ、人々が沙門惠休の才能を称えたり、晋の高僧支遁が山を愛した境地が感じられる。流れ行く水や一片の雲を通して世の中を観たり、鳥の声や樵夫の囁きが詩に加わってくる。

㈣ 天明三年（一七八三）の作

茶山は前年に妻為が亡くなり、すでに、叔父高橋愼庵、弟汝梗を亡くしている。天明期になると大飢饉が始まり、さらに東海地方に地震が、六月には福山地方に大洪水があり、多くの死傷者と損害を出す。さらに七月には浅間山の噴火が重なり、全国的に一揆が勃発するなど世情不安が広がりはじめる。

子推子重空公見訪分得韻寒　黄葉夕陽村舎詩　前二―一

雨後西疇泥未乾　雨後の西疇　泥　未だ乾かず
好將農隙逐清歡　好し　農隙を将って　清歡を逐はん
鳥語爐鳴呼睡醒　鳥語　爐鳴　睡を呼んで醒まし
孤雲流水與心寛　孤雲流水　心とともに寛　なり
留客山堂憐晝永　客を留めて　山堂　昼の永きを憐れみ
惜梅村酒賀春寒　梅を惜しみて　村酒　春の寒さを賀す
此中自有眞遊在　此の中に　自から真遊の在る有り
不羨吹笙駕彩鸞　羨まず　笙を吹いて　彩鸞に駕を

（大意）

雨上がりの西の田畑はたっぷりと水を含んでいる。さあ、農閑の合間に風雅を求めて出かけよう。外では鳥の声、内では茶釜の鳴る音が眠気を覚ましてくれる。一片の雲、一筋の流れを見ると心がのびやかになってくる。この山家に客を留めて春の日永を楽しく暮らし、梅の散るのを惜しんで地酒を汲みながら早春を讃える。こうして自然の懐深く尋ねる中に真の遊びの楽しみがあるものだ。昔、笙の名手晋や才色秀でた彩鸞が人間界を捨て幸を求めるようなことは羨ましいとは思わない。

＊子推　河相君推。子重　桑田元厚。空公　大空上人

初秋、道光上人（出雲国平田法恩寺住職）の訪問を受けた茶山は、七月十五日川北村の西福寺に赴き満月を見ながら詩作に興じた。翌十六日、二人は遍照寺に大空上人を訪ねる。

七月十六日同道光上人登遍照寺途中

七月十六日道光上人と同に登る遍照寺途中　黄葉夕陽村舎詩　前二―四

黄昏尋寺入松栢　黄昏　寺を尋ねて　松柏に入る
雲濕衣衫水鳴屐　雲は衣衫を湿おし　水　屐に鳴る
不有月光能引人　月光　能く人を引くに有らずんば
何知臥虎是奇石　何んぞ知らん　臥虎　是れ奇石なるを

（大意）

黄昏　たそがれ。栢　常緑樹の総称　かしわの木。衫　衣服　下着。屐　木製の履物、下駄。臥　ふす、横たわる。

黄昏時。遍照寺を尋ねて松や栢の木の間を辿ると、お寺に雲がかかって着物がじっとりしてきた。足元では谷川のせせらぎが聞こえてくる。やがて月が出て、人や物がはっきり見えるようにならなければ、道端に怖い虎が臥せっているのか、珍しい形をした岩が虎に見えるのかよくわからない。

送大空上人之高野山　大空上人を高野山に之くを送る

黄葉夕陽村舎詩　前二―四

舊房何處鼎臺陰　旧房　何れ処ぞ　鼎台の陰
路入層雲獨自尋　路は層雲に入りて　独り自ら尋ぬ
魑魅語聞杉影暗　魑魅語　聞こえて　杉影暗く
麏麚跡在石根深　麏麚　跡在って　石根　深し
齋過衆寺籠山靄　斎過ぎて　衆寺　山靄を籠め
講罷群僧散磬音　講罷んで　群僧　磬音に散ず
方外原來無物累　方外　原来　物累無し
也知幽境配禪心　也た知る　幽境に禅心を配するを

鼎臺　高野山の別名。魑魅　ばけもの、高野の山深きをいう。麏麚　雌雄の鹿。齋　食事。磬　中国古代の打楽器、石や玉を吊るして打ち鳴らすもの。方外　儒教以外、法内に対する語、仏教をさす。物累　世事書物へのしばり、仏教は元来脱俗・出世間を説く。禪心　仏語、心を静めて真理を悟る、高野山という幽境に大空上人の禅心を取り合わせる意。

（大意）

上人の住持していた高野の旧房はどのあたりでしたか。かつて私は層雲の中を登って独りお参りしたことがある。生い茂る杉林は昼なお暗く化け物の声でも聞こえてきそうで、雄鹿雌鹿の足跡が石を深くうがって木々の根が露出した道のあちこちにあった。寺々では食事が終わって、もやがたちこめ、講説が終わって僧侶たちが磬の合図でそれぞれの房へ散って行かれる。それは規則正しく行われ澄ましたものだった。仏教ではもともと、脱俗を説かれるだけあって俗塵を絶った高野の聖域であった。こうした所へ還っていかれるあなたの禅心は、一層光明を加えることでしょう。

【ちょっと休憩】　茶山の政治批判詩と拙斎

茶山の「政治批判詩」は、かけがえのない友人であり、畏敬の念をもって師とも仰ぐ西山拙斎の存在が大きい。拙斎は備中鴨方の人。名は正。二人は度々互いに行き来した。

「政治は幕府ではなく、天皇が行うべきである」という拙斎の考え方に強い影響を受け、「閑谷」「有鳥三首」「龍盤」「窮隣」「丁屋路上」等の詩が『黄葉夕陽村舎詩』前編に見られる。他にも政治批判詩を詠んでいるが、頼山陽の意見を容れて「幕府の咎め」に触れそうな政治批判詩は『黄葉夕陽村舎詩』には掲載していない。

西山拙斎画像
鴨方町教育委員会発行

㈤ 天明四年（一七八四）の作

登高同空充上人賦　黄葉夕陽村舎詩　前二―十一

登高　空（大空）充（恵充）上人と同に賦す

大野秋容入酒觴　大野　秋容　酒　觴に入る
登高携客正斜陽　登高　客を　携（たずさ）え　正に斜陽
賞心且作須臾樂　心を賞して　且（しばらく）　須臾（しゅゆ）の楽を作す
世態難逃日夜忙　世態　日夜の忙より　逃れ難し
遠水忽明踈雨外　遠水　忽（たちま）ち明るし　疎雨（そう）の外
孤巒迴出暫雲傍　孤巒（こらん）　迴（はる）かに出ず　暫雲（ざんうん）の　傍（かたわら）
人生幾得好重九　人生　幾（いく）ときか　好重九（こうちょうく）を得ん
紫菊丹萸依舊香　紫菊（しきく）　丹萸（たんゆ）　旧に依って香し

空　大空上人。　充　寶泉寺乗如上人。　酒觴　酒杯。須臾　しばらくの間。世態　世相。　疎雨　あらい雨。　巒　ちいさくとがった山。　暫　わずかな間。重九　重陽の節句（九月九日）。萸　ぐみ。

（大意）

広大な野の秋の景色が酒杯に映る。重陽の節句に客と共に登高すればちょうど夕日が斜めにさしている。景色を愛でる風流な心はつかの間の楽しみとなる。しかし、この世の日々の忙しさからは逃れることはできない。俄雨がやんで、遠くの水は忽ち明るくなり、ぽつんと小高い山がはるか向こうの雲の傍らに見えている。人生のうちには何度も重陽の節句を迎えるが、紫の菊や丹色のぐみも昔と変わらず香しいことである。

㈥ 天明五年（一七八五）の作

松風館の項で「天明五年三月十二日。西山拙斎、姫井仲明（桃源）頼千祺（杏坪）が茶山を訪ねる。前日には神辺龍泉寺に遊び、翌日河相君推宅を訪ねる」と述べたが、この中條への道中で四人が連歌を作っている。

各中條山聯詠　菅茶山書

林月印池風度松　惟柔　林月　池に　印（いん）し　風は松を　度（わた）る
晩鴉歸處緑重重　元哲　晩　鴉（からす）の帰る所　緑重重
紅雲背指嘗遊地　晋帥　紅雲（こううん）　背指（はいし）す　嘗（かつ）っての遊地
認得黄龍山寺鐘　正　認得す　黄龍山の寺鐘

出典　『菅茶山とゆかりの人々』菅茶山記念館

（大意）

林の中にある月は池に映り、風は林の中を通り過ぎていく。夜鴉の帰るねぐらは緑に幾重にも重なっている。夕焼け雲は今日遊んだ所を指している。そんな時に黄龍山遍照寺の鐘が鳴るのに気がついた。

＊ 惟柔　頼杏坪　諱は惟柔、字は千祺。通称が杏坪。安芸竹原出身で頼春水の末弟。広島藩儒、後に三次地方の郡奉行などを務める。山陽道を通るたびに茶山を訪ねる。茶山墓碑の撰書を委ねられている。

＊　元哲　姫井桃源　名は元哲。字は桃源。備中鴨方の人で拙斎の親友で、茶山と年齢が近いこともあり頻繁に交遊があった。岡山藩儒となり閑谷学校を司った。

次の「所見」の漢詩は「乙巳」とあり天明五年作とわかる。茶山日記によれば、「七月十五日　黄葉夕陽村舎で友人」と、「十六日には福山で牛海（備後福山の修験者）」を訪ね詩を詠む。さらに、八月十五日「中秋飲河相君推宅」という七律をよんでいる。この詩の前にあるのが次の詩で、月を求めて遍照寺に登ったことがわかる。

所見　　黄葉夕陽村舎詩　前二―十八

登山待月生　山に登りて月の生まるるを待つ
夕陽紅未衰　夕陽　紅未だ衰えず
上上身漸高　上り上りて　身は漸く高し
月在歸禽背　月は　帰禽の背に在り

帰禽　ねぐらに帰る小鳥

（大意）

山に登って名月が出るのを待つ。夕日がようやく沈みかけたが、まだまだ明るい。

遍照寺への参道を登ってようやくお寺に到着すると、名月はねぐらに還る鳥の上に見えている。

遍照寺本堂と庫 裏

(七)　天明六年（一七八六）の作

同道光上人登黄龍山分得一字　黄葉夕陽村舎詩　前三―七

松風謖謖雲行疾　松風　謖謖　雲　行くこと疾し
今夜陰晴占應吉　今夜の陰晴　占へば応に　吉なるべし
秋林聲應童剥棗　秋林　声は童の　棗を剥に応じて
晩厨香迸僧煨栗　晩厨　香迸り　僧　栗を煨る
起上西嵒望南天　起って　西嵒に上り南天を望めば
遥波如杯鴉背出　遥波　杯の如く　鴉背より出ず
勝處隣郷來幾回　勝処　隣郷　来ること幾回
幽期多在忙中失　幽期　多くは忙中に在りて失す
龍門臥雲思杜二　龍門　雲に臥して　杜二を思い
虎渓歩月伴靈一　虎渓　月に歩みて　霊一を伴う
喜君再遊約不違　君が　再遊の約を違わざるを喜ぶ
醉尋舊題看載日　醉いて　旧題を尋ねて載日を看る

謖謖　松風の声。棗　なつめ。煨　うずみ火で焼く。嵒　岩。勝處　景色のすぐれた所。杜二　杜甫。龍門　河津にある山峡、龍門の言葉の語源。虎渓　廬山東林寺の前にある。靈一　一つの心の意。杜二に対応したもの。載日　記載した日。

（大意）

松風が謖謖と吹いて雲の流れが速い。今夜はきっと晴れて月が見られ

るに違いない。秋の林では棗が熟れて、それを打ち落とす童の声が響き、晩の台所では僧が栗を埋火で焼いておりここまで香が届いて来る。起きて西にある岩に登り南の空を眺めれば、遥かな山並みが飛ぶ鴉の背の上に見えている。この隣郷にある遍照寺へは幾度もやって来ているのに、私は多忙でこの素晴らしい景色をじっくり味わえないでいる。龍が天に昇り雲に臥す中国の杜甫を想い、月夜に虎渓を歩いて僧霊一を伴として味わい深い話をしよう。あなた（道光上人）が再びやってくるという約束を破らなかったことがうれしい。酔って昔作った詩を思い出してその日付を辿ってみよう。

⑻ 天明七年（一七八七）の作

百姓一揆もおさまり、詩友と近隣を吟行している。

黄龍山　黄葉夕陽村舎詩　前三―十二

來時望衆峰　来時　衆峰を望めば
奇絶令人躍　奇絶　人を躍ら令む
來顧來時路　来たって　来時の路を顧みれば
郊原亦不悪　郊原　亦悪しからず

奇絶　素晴らしい絶景。郊　町はずれ、くに境。

（大意）

遍照寺に登って来る時、まわりの山々を眺めると、その景色は人を寄せつけないほど素晴らしく、人を踊りあがらせるものである。遍照寺まで登ってきて、今来た道を振り返って見下すと、神辺平野の田圃の眺めも悪くはない。

⑼ 寛政十年（一七九八）の作

安永七年の項に記したように茶山は永富充國、松井子璐、河相子蘭らと遍照寺を訪ねた。この年、永富充國と再び共に訪れて詩を詠んでいる。

詩碑「黄龍山呈充國」

黄龍山呈充國　黄龍山　充國に呈す

充國遊此距今二十年矣當時唱和者篁大道大空上人松井子璐諸人今皆不在獨河子蘭及余存

黄葉夕陽村舎詩　前五―二

長松大石舊林邱　長松大石　旧林邱
二十餘年感壑舟　二十余年　壑舟を感ず
嘆息當時携手者　嘆息す　当時　手を携えし者
幾人相對説曾遊　幾人か相対して　曽遊を説かん

壑舟　壑は穴、穴の開いた舟、人の世は無常だと使っている。

曾遊　かつて遊んだ（詩を詠んだ）。

（この詩にはながい傍注がある）

充國　此に遊ぶこと　今を距てること二十年なりや　当時　唱和する者　篁　大道、大空上人、松井子璐、諸人今は皆な在ず　独り河相

子蘭及び余存す。

（大意）

昔遊んだ林の丘や長い松、大きな石を見ていると、二十年以上経った今も変わらないことに感慨を覚える。だが、当時吟遊した友は、ほとんど亡くなってしまった。残った幾人かで、昔を懐かしく語り合おう。

遍照寺を訪れた後、一行は続いて河相子蘭宅に向かう。

同充國訪子蘭　　充國と同に子蘭を訪う

黄葉夕陽村舎詩　前五―二

楚雲湘水二十年　　楚雲　湘水　二十年

屈指同遊半九泉　　指を屈すれば　同遊　半ばは　九泉

舊侶獨存君與我　　旧侶　独り存す　君与我

尊前道故賀華顛　　尊前　故きを道って　華顛を賀す

楚雲湘水　楚の国にかかる雲や洞庭湖に流れこむ川、詩では、世渡りの苦労を重ねる意味。九泉　あの世。侶　仲間。尊　樽。道　語ること。華顛　華は髪の白いこと、顛は頭。

（大意）

あれこれと世渡りして既に二十年。指を折り数えてみると、一緒に遊んだ仲間の半数が亡くなっている。昔の仲間は君と私が残っているだけだ、酒徳利を前にして、昔馴染みについて語り合った。白髪頭になるまで長生きができてめでたいものだ。

㈥ 文化七年（一八一〇）以前の作

『黄葉夕陽村舎詩』後編巻一と二は、前編から漏れたものを取り上げている。後編巻一と二から六首をあげる。

偶檢巾箱得亡友藤井蘭水菅波子裕松井子璐高見新助書悽然賦此

偶　巾箱を検べ亡友藤井蘭水、菅波子裕、松井子璐、高見新助が書を得て悽然として此を賦す

黄葉夕陽村舎詩　後一―十七

黄公壚上幾追隨　　黄公　壚上　幾たびか追随す

忽見遺文感往時　　忽ち遺文を見て往時を感ず

淡墨數行磨欲滅　　淡墨　数行　磨て　滅せんと欲す

幽魂十載去何之　　幽魂　十載　去って何れにか之く

疎燈細雨論心夜　　疎燈　細雨　心を論ずる夜

月底花陰鬪酒期　　月底　花陰　酒を鬪むる期

獨倚晴軒舒且卷　　独り晴軒に倚って　舒べ且つ巻く

流鶯聲裡夕陽移　　流鶯　声裡　夕陽移る

巾箱　手文庫。悽然　いたましい、かなしい。壚　いろり。淡墨　うすい墨。十載　十年。磨滅　すりへる。幽魂　死者の魂。倚　よりかかる。舒　広げる。

（大意）

黄龍山遍照寺の上人を何度も一緒に訪ねて行ったものだ。手文庫の中にある故人が残した文を読み返すと、かつての事を思い出す。薄墨

で書かれた数行の文字は擦れて消えそうになっている。亡き友の魂は十年経った今、何処に行ってしまったのか。　まばらな燈や霧雨が降る時も真理をめぐって議論した夜や月の灯りや花の下での友に酒を酌み交わした時もあった。独り晴れた軒下に座って亡友の文を広げて読み納める。木々の間を鳴きながら移る鶯の声と共に夕日が傾いていく。

＊菅波子裕　菅波家の一族であると思わるが、詳細は不明。

＊高見新助　福山の人。「高見屋」という商人と思われるが不明。

＊藤井蘭水　神辺川南村庄屋藤井茂清の養子となる。茂清に男子が生まれたので別家する。茶山の私塾の支援者。詩「龍泉寺桜」にある「闘酒人」が蘭水である。

龍泉寺櫻
寺有亡友蘭水墓
黄葉夕陽村舎詩
前二ー九
老樹移來幾百春
年年麗艶占芳辰
林東在墓生苔鮮
曾是花前闘酒人

藤井家墓域

龍泉寺本堂前の詩碑

同道光上人登黄龍山分得重字
道光上人と同に黄龍山に登り、分かちて重の字を得たり
黄葉夕陽村舎詩　後一ー十九
老禪方丈最高峯　老禅の方丈　最高峰
蹈破中條紫翠濃　踏破す　中條の紫翠　濃まやかなり
湖海萍遊無路梗　湖海　萍遊　路の梗ぐなく
乾坤樗散有人容　乾坤　樗散　人の容るる有り
松杉風外郊坰迴　松杉風外　郊坰迴かに
簷篔香中洞壑重　簷篔香中　洞壑重なる
閑境剩知魂夢穏　閑境　剩え知る　魂夢穏やかなるを
起來將及午齋鐘　起って來たれば　將に午斎の鐘に及ばんとす

老禅　大空上人を崇めた呼び方。方丈　ささやかな庵。踏破　踏み歩く。紫翠　山の形容で、青葉若葉のようす。湖海　ここでは世間。萍　浮草。梗　通るのを邪魔する、ふさぐ。乾坤　乾は西北、坤は西南で、ここでは世間。樗散　樗櫟散木の略で樗も櫟も使い道のない木で転じて役に立たないこと。松杉風外　山の松や杉を吹き渡る風。郊坰迴　郊は町はずれ、坰は都から遠く離れた地。簷篔　簷はのき、篔は竹、ここでは軒下に植えてある竹。洞壑　洞はほら、壑はたに。齋　食事。

（大意）

大空上人の庵は最高峰にある。青葉若葉の翠の中を登ってきた。渡

る世間には無能で役に立たない人間を受け容れてくれる所もある。遥か町外れ山の松杉を風が吹き抜けている。軒の竹の香が谷に広がっている。お参りしたら、この時を待ち受けていたように、午鐘が鳴りだした。

＊ 道光上人（一七四六～一八二九）

茶山が京都遊学時に出会う。出雲国平田の報恩寺住職となり、度々芸備を訪ねる。茶山を訪ねた際には、長逗留した人でもある。茶山と近隣を吟遊しており、遍照寺にも度々訪れている。

次韻大空上人感事作　大空上人の事に感じての作に次韻す

黄葉夕陽村舎詩　後二―十

人間毀譽鎮啾啾　人間の毀誉　鎮まって　啾啾
偶入閑聽亦作憂　偶たま　閑聴に入るも　亦た憂いを作す
轉羨山中無暦日　転た羨む　山中　暦日無きを
何曾皮裡有陽秋　何ぞ曽て皮裡　陽秋有らんや

人間　世間、世の中。　毀譽　謗ること、誉めること。　啾啾　低い声が長く尾を引いてほそ細と続くこと。　山中無暦日　世間のあくせくした生活に関係ない。皮裡　皮かぶりをして中身を隠していること。陽秋　春秋。

（大意）

世の中の褒めたりくさしたりは鎮まったが、低い声は耳の底に細々と長く続いている。その声がたまたま聞こえないようになれば、また、どう思っているのだろうと気になる。山の生活には暦は必要なく、世間のあくせくした生活に関係ない暮らしをしておられることが、いよいよ羨ましい。どうして皮かぶりをしているのに、ふたごころを隠すことがあろうか。

登黄龍山　黄葉夕陽村舎詩　後二―十二

彩翠糢糊晩照春　彩翠　糢糊として晩照　春く
不知何處是黄龍　知らず　いずれの処か　是れ黄龍
狂謌直蹈危巖上　狂謌　直ちに　危巖を踏みて上る
屐底驚濤萬壑松　屐底の驚涛　万壑の松

春　臼で穀物をつく。晩照　日没直後の陽光。　狂謌　戯れに吟ずる、冗談詩。危巖　危なげに重なっている岩。　屐底　下駄の底。驚濤　荒れ狂う波。上から見ると荒れ狂う波のように見えるさま。壑　谷。

（大意）

今しも樹々の緑が夕陽を受けて霞み、夕日が今にも入ろうか戻ろうかと戸惑って見えるよう見える。霞んでどこが黄龍山遍照寺なのかよく見えない。戯れに歌を口ずさんでいると大きな岩の上に立っている。奇岩の上に立って麓の方を見ると、足許に広がる松林が荒れ狂う波のように広がっている。

山中示河篁諸子　黄葉夕陽村舎詩　後二―十三

山深薬草四時花　山深くして　薬草　四時花さく
路徑無人鳥語譁　路径（ろけい）　人無く　鳥語　譁（かまびすし）
莫笑石頭眠至夜　笑う莫れ　石頭　眠って夜に至るを
丹崖碧樹本吾家　丹崖（たんがい）　碧樹（へきじゅ）　本（も）と吾が家

石頭　石のほとり。丹崖碧樹　赤いがけや緑色の樹。

（大意）

山が深くて薬草の花がいつでも咲いている。山道は人影もなく鳥の鳴き声だけがかしましい。石の傍に眠って夜になろうとも君たちは笑ってくれるな。丹色の崖や緑の木々が茂る美しい深山こそ本来の吾が家だもの。

＊河　河相子蘭か君推であろう。　篁　篁大道であろう。

遍照寺　黄葉夕陽村舎詩　後二―十五

撫松拜石入雲霞　松を撫（な）で　石を拝して　雲霞（うんか）に入る
満路清風紫楝花　満路の清風（せいふう）　紫楝（しれん）の花
香篆艾烟岑寂甚　香篆（こうてん）　艾烟（がいえん）　岑寂（しんじゃく）　甚し
緑陰堆裡病僧家　緑陰（りょくいん）　堆裡（たいり）　病僧の家

楝　センダンの木　紫の小さな花をつける。艾烟　お灸のもぐさで、その煙。篆　印章に使う文字。岑寂　ひっそり物静かなこと。緑陰　緑の陰が堆く映してだされている状況。

（大意）

立派な枝ぶりの松、形のいい石などをみながら霞のかかったような遍照寺の参道を登る。センダンの木々が紫の花をつけた枝を一杯広げて、花の匂いを含んで清らかな風が吹いている。上人の枕元の香炉から、印章の形をしたお灸の烟がゆらゆらとたちのぼっており、緑の陰がふんだんにある部屋で養生されている。

＊句碑　遍照寺本堂前の「良夜の碑」

「月白風清如此良夜何」

（大意）月白く風清し
此の良夜を如何せん

【ちょっと休憩】茶山も和歌を少なからず詠んでいるので紹介する。

天明八年　山田早苗
せきいるゝ山田の水のあさみとりなひく早苗の色もすゝしき

文化元年　江戸行詠草
中空にありとはきけときて見れは
さらに驚く富士のやたかさ

文化八年　菅　萬年(公壽)歿に当り
老いらくの我か跡をこそたのしみに
われにとわるゝ塚となりしか

（『菅茶山の詠歌』　菅波寛編　葦陽文化研究会発行）

菅茶山が往来した中條路

一　中條往還

茶山は河相君推・松風館だけでなく、遍照寺や吟友を頻繁に訪ねている。

茶山が中條へ辿る道は、二通りの道があったと推定される。

㈠ 丁屋道（ちょうやみち）

掛の橋（大仙坊橋）～豊久保～丁屋（山田川沿い）～山田谷　遍照寺など

㈡箱田道

掛の橋（大仙坊橋）～秋丸～箱田（箱田川沿い）～山田谷　遍照寺など

中條への往復路で詠んだ詩は時期のはっきりしないものが多い。『黄葉夕陽村舎詩』や詩の内容などから推測して掲載する。

大仙坊橋　橋の左に廉塾
下流に「掛の橋」が見える

箱田川

中陣池から見た山田谷

箱田川畔に建つ地蔵堂

山田川と山田谷

二　往来途上で詠んだ詩

㈠ 天明二年（一七八二）以前の作

『黄葉夕陽村舎詩』の前編巻一には天明二年までに詠まれた詩が掲載されている。この詩は比較的早い時期の作品であると思われる。

上寒水寺路上　寒水寺に上る路上

黄葉夕陽村舎詩　前一―九

寺見飛禽外　寺は見ゆ　飛禽（ひきん）の外
泉鳴雑樹中　泉は鳴る　雑樹の中
狂痴従世棄　狂痴（きょうち）　世の棄（す）つるに従（まか）せ
尊酒有人同　尊酒（そんしゅ）　人の同じうする有り
尋徑追牛跡　径（みち）を尋ねて牛跡を追い
班荊待午風　荊（けい）を班（わか）って　午風（ごふう）を待つ
雲松随處在　雲松（うんしょう）　随処に在り
吾道幾時窮　吾が道　幾時か　窮（きわま）らん

狂痴　狂った痴れ者（茶山の自称）。　尊酒　酒樽。　従　まかす。
尊　酒の容器。　徑　小道。

（大意）

寒水寺が鳥の飛んでいる空の向こうに見える。足下の谷川の水音が雑樹の繁みの中から聞こえる。世間が狂痴な自分を相手にしてくれないのに任せている。（ただ）酒の座だけには仲間に入れてもらえる。小径に牛の足

跡を尋ねて上り、草を敷いて座り、午の風を待っている。到るところに雲のかかった松があり、自分の道はいつになっても行きつまることはないだろう。

（背景）

茶山は二十歳後半から三十歳代にかけて、災害や年貢取立の厳しさなどによる農村の疲弊状況に心を痛め、幕政や藩政に対して鋭い批判をしていた。それは「有鳥」「御領山大石の歌」「龍盤」「狂痴」など詠まれた詩からもわかる。この詩はこの時代に詠まれたと推測される。この詩でも「吾道幾時窮」と自分の無力さを嘆きながら、いつの日にか必ずや学種による世直しをと決意を表明している。

＊　寒水寺について　（参考　福山市神辺歴史民俗資料館ホームページ）

寒水寺は山号を明尾山と称する真言宗大覚寺派の寺院である。訪ねるには堂々川沿いの道を登っていくと、その入口に「寒水寺」と記した石碑が建っている。その立地はまさしく修業の場としての寺院であったことがわかる。旧参道には地蔵二体を半浮彫りにした巨岩があり、さらに登ると仰ぎ見るように地蔵が彫られ、霊地に入る導きのようで、山岳寺院として四隣を圧していたことがうかがえる。

「西中條村誌」によると「七堂伽藍（がらん）を配し、十二子院があった」とされる。

寒水寺本堂

○「上寒水寺路上」の後に次の詩が掲載されている。寒水寺への途中か、遍照寺への途中かは不明だが、「三年困世營」とあり気になる詩である。

松　間　　黄葉夕陽村舍詩　前一―十

松間値樵夫　　松間　樵夫に値うて
閑話坐班荊　　閑話　坐して　荊を班つ
縹緲中條色　　縹　緲たり　中條の色
蒼茫太古情　　蒼　茫たり　太古の情
午鐘知遠寺　　午鐘　遠寺を知る
霽樹辨遥城　　霽　樹　遥城を弁ず
愧昔為亭吏　　愧ず　昔　亭吏と為って
三年困世營　　三年　世営に　困しを

値　遇う。　樵夫　木こり。　班　敷く。縹緲　ひるがえるさま。中條山　中国山東省に名山中條山があり。蒼茫　広々としたさま。　霽　はれわたるさま。　亭吏　宿場の長（当時本荘屋が本陣でもあった）。

（大意）

松林を登る途中で木こりに出会って、草を敷いて座り暫く世間話をした。中條の山々はほんのりして、果てしなく広がり何となく太古の世界に後戻りしたように思われる。午を告げる鐘の音で遠くにお寺があることがわかる。晴れた樹々の間からはるかに福山のお城がそれとなくわかる。私が宿場役人となって三年間世俗を相手にあくせくしたことを恥ずかしく思い出す。

＊　本荘屋の養子であった期間は一年ばかりであったが、詩的表現で

あろうか三年としている。この事はあまり知られていない。

（背景）

茶山の本家である本荘屋菅波家では、当主好殷の子は娘二人で男子がおらず跡継ぎ問題があった。明和二年（一七六五）好殷が死去する。そこで本荘屋菅波家後継者に白羽の矢が立ったのが茶山である。

『菅波信道一代記』（前編巻之八）に「分家之太中ヲ養子ニシテ妻ス。」とある。茶山には五歳下に弟汝梗がおり、本家本荘屋の跡継ぎにと望まれたのである。茶山は姐娘（あね）と結婚し本荘屋の養子となり、名前を「百助」から「久次郎」に改めている。

東本陣跡　台所門
『神辺宿の今昔』（神辺宿文化研究会）より

『文恭先生年譜略』にも「（茶山）年十八にして其の家を継ぎ、通称久治郎（久次郎）と改め里正となり、居る事一年許にして里正職を厭い文字を嗜み（後略）一年余りで離縁」とある。

本家本荘屋は川北村の里正（庄屋）で、村の代表であり行政機構の末端である。日常のもめごとから、藩からの命令文書の伝達など多岐にわたっていたことが推測され、茶山は、その繁多な日常に困惑し、里正の職務より、学問に専念したいと願っていたのであろう。

どのような経過かは不明だが、約一年余に離縁となる。茶山の後継には、手城村神尾平左衛門の子亮方が迎えられ本荘屋五代目となっている。茶山は本荘屋を継いで苦労したことを思い返して詩にしている。

○　また、次の詩を詠んでいる。

九日与諸子上寒水山　　集外　　菅茶山遺稿

醉避斜暉下畫巒　醉を避け　斜暉　畫巒（がらん）を下る
茶鐺支石坐臨湍　茶鐺（さとう）は石をして支え　臨湍（りんたん）に坐す
回頭世上皆塵土　頭（こうべ）を回（めぐら）せば　世上　皆な塵土（じんど）
如此重陽得亦難　此（か）くの如く　重陽（ちょうよう）　亦（また）難を得ん

暉　ひかり、輝き。　巒　峰、山並み。茶鐺　茶をわかす足のある釜。湍　早瀬。　塵土　けがれた世。重陽　九月九日、菊の節句で登高と称して山に登っていた。難　なやみ

（大意）

酔いを醒まして夕方になって絵に画いたような山並みを下る。茶をわかす釜がうまく置かれず、石で支え早瀬の側に座る。私の周りを見てみると、正義がおろそかにされ、世間は皆けがれているように思う。重陽の節句を祝ったばかりなのに、また悩みを抱え込んでしまった。

寒水寺の旧参道

㈡　天明四年（一七八四）の作

雪日還自中條　　黄葉夕陽村舎詩　前二―七

春雪如篩野無風　　春雪　篩うが如く　野　風無し
飛絮舞入輿簾中　　飛絮　舞うて入る　輿簾の中
同雲模糊去鳥没　　同雲　模糊として　去　鳥　没し
近山隠見遠山空　　近山　隠見して　遠山空し
僕夫忍凍數顰眉　　僕夫凍を忍び　数々眉を顰め
余亦擁褐縮頭亀　　余　亦た褐を擁して　頭を縮むる亀
苦境由來人争避　　苦境　由来　人争うて避く
誰知此中樂自随　　誰か知らん　此の中に楽しみ　自ら　随うを
將策試深欲盈尺　　策を将って　深さを　試むれば尺に盈ちんと欲す
乾坤俄爲無瑕璧　　乾坤　俄かに無瑕の璧と為る
吉凶糾繩歳流波　　吉凶　縄を　糾うて　歳　波を流し
營謀何如時賞適　　営謀　何ぞ時に賞適するに如かんや
歸來温酒看瓶梅　　帰り来たって　酒を温めて　瓶梅を看れば
輿中苦樂兩陳迹　　輿中　苦楽　両つながら陳迹

篩　ふるい。絮　わた。輿簾　すだれのついた輿。同雲　雪雲か。僕夫　かごかき。褐　ぬのこ、綿入れ。策　むち。無瑕璧　傷のない玉、万物雪の覆われて一様に美しくなること。吉凶糾繩　吉凶が別物ではなく一本の縄のように入り混じる。營謀　人生のいとなみ。時賞適　その時々を賞して満足する。陳迹　古い迹（あと）の意で過ぎ去った夢。

（大意）

雪が篩でおろすように風もない野に降りしきり、綿毛のように飛んで輿の簾の間から入ってくる。雪雲が朧にたちこめて飛ぶ鳥も見えなくなり、近くの山々も見え隠れして、遠くの山は見えない。僕夫はしばしば寒さをこらえて顔をしかめ、自分もまた綿入れをかぶって亀の如く頭を引っ込める。元来人間は苦境を争うて避けたがるが、むしろ苦境を凌ぐことの中にこそ楽しみがあることをだれ一人知る者はいない。杖をもって深さをはかるともう一尺以上積もった。あたり一面雪にすっぽり包まれて等しく傷のない玉のごとく美しくなった。人の吉凶はあざなえる縄の如く年月が流れていくものだ。計画も実践も苦楽に一喜一憂することなく、その時々を賞適するに越したことはない。家に帰りつくと早速酒を温めて、瓶に挿した梅の花を見ていると、今しがた通ってきた雪道の苦と楽がまるで夢のようだ。

㈢ 天明六年（一七八六）の作

長く続いた賄賂政治の元凶と言われた田沼意次が失脚し、松平定信が老中となる。茶山は世の中が変わると大いに期待した時期で詩にもその期待感が見える。

丁屋路上　　黄葉夕陽村舎詩　前三―十三

柳塢梅墩入午晴　　柳塢　梅墩　午晴に入り
江鄉臘月已春生　　江郷　臘月　已に春生ず
風收木末鳥將語　　風収まり　木末　鳥将に語らんとし
暖到陂心氷有聲　　暖は陂心に到りて　氷に声あり

仍見諸曹除舊弊　仍ほ見る　諸曹の旧弊を除するを
近傳三府擢時英　近ごろ伝ふ　三府　時英を擢くと
去年今日山陽道　去年の今日　山陽道
群盗如毛白晝行　群盗毛の如く　白昼に行きしを

塢　どて。　墩　小高い丘。臘月　陰暦十二月。陂　どて。諸曹　それぞれの役所。曹　つかさ。去年今日　一年前。

（大意）

柳の土手も梅の咲く丘も　水辺の村里では十二月に早や春の兆しがうかがえる。寒風も収まり木々では鶯のさえずる声がする。暖気が堤防の中まで届くと、氷がゆるんで溶ける音がする。そのうえ役所の各部署ではかつての弊害が除かれたとのこと。近頃、江戸などの中央では英俊の誉れ高い人物を抜擢したということだ。一年前には田沼意次が老中にあり、街道筋には盗賊が白昼群れをなしていたのに、盗人たちは獣のごとく何処かに消え聞かなくなってしまった。

＊丁屋　西中条深水地区の入り口で中陣池北側付近。

この池の東側には深水地区があり、谷を隔てて山田谷がある。「丁屋」という小字は正確には読んでもらえず、「ようろや」としている書物もある。

中陣池と丁屋地区

所見　黄葉夕陽村舎詩　前三ー四
落日殘紅在　落日　残紅在り
新秧嫩翠重　新秧　嫩翠　重なる
遥雷何處雨　遥雷　何れの処の雨ぞ
雲没兩三峰　雲は没する　両三峰

秧　苗。　嫩　若くてしなやか。　翠　みどり。重　野山の緑に囲まれた田圃にさらに若苗の緑を添える。遥雷　遠くでなる雷。

（大意）

夕日が西の空を赤く染めている。野山の緑に囲まれた田圃の若苗の緑が目にしみる。遠雷の底鳴りはどこに雨を降らしているのだろうか。あっという間に雲がひろがって二つ三つ峰を隠してしまった。

〔背景〕この詩は十勝碑林の中に詩碑として建立されている。

作詩年は、「丙午」とあるので、天明六年であることがわかる。この時期は候不順で不作か続き農民の暮らしはひっ迫していた。茶山は田植えが終わり、若苗を西日が照らしている様を見て、今年の豊作を願って詠んだのであろう。

詩碑「所見」

㈣ 寛政五（癸丑）年（一七九三）の作

即事　黄葉夕陽村舎詩　前四―三

晨氣襄林霧　晨気　林霧を襄げて
晴光滿野堂　晴光　野堂に満つ
雀鳴何喈喈　雀鳴　何ぞ喈喈たる
早稲已登場　早稲　已に場に登る

晨氣　明け方の大気。襄　からげる、着物の裾を端折ること。喈　鳴く、叫ぶ。早稲　早稲の稲。場に登る～お眼にかからせてもらう。

（大意）

靄のかかった明け方のぼんやりとしていた林が、まるで裾から端折っていくかのように霧が消えていき、はっきり見えるようになった。やがて、日の光が野堂をいっぱいに照らしだした。雀や野鳥が何と矢継ぎ早に鳴くことだろう。田んぼには早稲の稲が早くも穂を出している。

寛政四年（一七九二）　茶山は福山藩より五人扶持を給せられる。

藩主阿部正倫公が林大学守と詩について語った時、当世第一の詩人として茶山の名前を挙げた。阿部侯は早速家来に命じて茶山の学問や人物について詳しいことを問わせ、やがて五人扶持を給した。このことは頼山陽の「茶山先生行状」に記してある。

㈤ 寛政十一年（一七九九）の作

中條歸路次文輔韻　黄葉夕陽村舎詩　前五―七

郊雲釀雨夜山低　郊雲　雨を釀して　夜山低し
家指長松亂竹西　家は指す　長松　乱竹の西
十里野程人不見　十里の野程　人見えず
秧雞角角隔林啼　秧鶏角角　林を隔てて啼く

長松　背の高い松。乱竹　竹が入り乱れて茂っている様。秧鶏　クイナ。角角　叩くように鳴く。＊文輔については不明

（大意）

村の山に雲が立ち込めていて、今にも雨が降り出しそうだ。夜の山の稜線がどんよりとした天気でぼんやりと見える。目指す自分の家は、十里（遠い）の野の道には人気もない。クイナがカクカクと林の向こうで鳴いている。

○　詠まれた時期は不明だが、文化七年（一八一〇）以前に詠まれた詩

次韻小河貞藏中條途中作　黄葉夕陽村舎詩　後二―五

雨鳴簑袂急陰風　雨は簑袂に鳴り　陰風　急なり
拂面烟霏洗酒紅　面を払い　烟霏　酒紅を洗う
欲向前村暫相避　前村に向い　暫く　相避けんと欲す
人家已在夕陽中　人家は已に　夕陽の中に在り

簑袂　蓑と袖。陰風　北風、陰気で殺伐な風。　烟霏　煙と靄、靄がたなびく。

（大意）

簑を濡らし袂を流れるほどの雨と北風がビュービュー吹き荒れる。靄がたなびき酒で赤くなった顔を撫ぜていく。たまりかねて、風雨を避けようと前方に見える近くの村にむけて急ぐ。人家が近くなったら風雨もやみ夕日が差してきた。

＊　小河貞藏　備中国倉敷の人。幼児期神辺に住む。

㈥　文化七年（一八一〇）の作

十七夜雨還自中條　十七夜　雨　中條自り還る

黄葉夕陽村舎詩　後二―十一

雨跳簑袂氣陰森　雨は簑袂に跳て　気陰森たり

四野空濛夜已深　四野　空濛として　夜已深し

仰看片雲頭上白　仰ぎ看る　片雲　頭上に白く

知佗明月到天心　知んぬ佗の明月の　天心に到るを

陰森　薄暗くて物寂しい。濛　小雨や霧雨。

知んぬ「はあぁ、わかった」という意。佗　他と同じ。天心　天の真上。

（大意）

降る雨が着ている蓑の袂に飛び散って、あたりは暗くて物寂しい。四方どちらを向いても霧雨で何も見えない。しかも夜はかなり更けた時分だ。見上げると空には一塊の雲が見え、月のあるところが白く見える。そうか、明月が天の真上に登ってきているのだな。

＊　此の夜は小雨が降り、月が見えなかったのだろう。しかし、雲の向こうにぼんやりと浮かぶ月を観て詠んだのでしょう。このようにいつも帰るのは夜も更けた時刻であったのだろう。

㈦　文化九年（一八一二）から十年（一八一三）にかけての作

與佐藤子文同往中條路上口號

佐藤子文と同に往く中條路上口号

黄葉夕陽村舎詩　後四―二十三

久留詞客臥田家　久しく詞客を留めて田家に臥す

偶値晴和命鹿車　偶たま晴和に値うて　鹿車を命ず

澗涸白沙全解凍　澗は涸れて　白沙全く凍を解き

野喧黄菜誤生花　野喧にして　黄菜誤って　花を生ず

村聲有趣聽逾好　村声　趣有り　聴きて　逾好し

山路無程興也加　山路　程無し　興也た加わる

但恐荒涼使君厭　但だ恐れる　荒涼　君をして厭わしむるを

都人平日慣豪華　都人は　平日　豪華に慣る

詞客　詩歌を作る人、文人。田家　百姓家、田舎の家。晴和　天気が晴れて気候が和んだ。鹿車　鹿の引く車、ここでは駕籠。澗　谷川。沙　砂。

（大意）

暫く文人（子文）を田舎の家に泊めて寝起きしてもらった。偶々、晴れて外気も和らいだ。水が涸れ白沙の谷川の氷が溶けた。野原では菜の花が時知らず咲き出した。村人の会話は品が有り、聴いていて好感が持てる。山路に差し掛かると一段と興味が湧き、果てしなく続いて行くように思える。ただ、あなたが厭きてしまうのではないかと。都会に住むあなたは平素贅沢な暮らしに慣れていらっしゃるから。

＊　佐藤子文　伊勢神宮の御師、神官としての身分は低いが、学識の高いグループ層。毎年、歳の暮れには新年の暦やお祓い札を配るため廉塾にもやって来て長逗留していたらしい。北條霞亭（伊勢出身）と親しく、霞亭の廉塾招聘、茶山姪敬との婚姻に助力している。

圓通寺同諸子賦　　黄葉夕陽村舎詩　後四―十四

春風三月古禪房　　春風　三月　古禪房
房後房前花木香　　房後　房前　花木　香（かんば）し
毎得一詩随手寫　　一詩を得る毎に　手に　随（したが）って写す
吟箋無字不韶光　　吟箋　字として　韶光（しょうこう）ならざるは無し

箋　詩文や手紙を書くのに用いる美しい紙。韶光　春の美しい景色。

（大意）

春三月　由緒ある古寺に温かな春の風が吹いている。周りの花木からかぐわしい香りが漂ってくる。詩が一つできると書き留める。詩箋の上には春の美しい光が当っている。

＊　この圓通寺で詠んだ詩が、玉島にある良寛上人の修行した圓通寺とする書物がある。しかし、茶山日記や詠まれた情景からして、この圓通寺は東中条の圓通寺であることがわかる。

上廣山寺途中作　　集外菅茶山遺稿

甘雨荒村路　　甘雨　荒村の路
佳招多寺期　　佳招（かしょう）　多寺に期するを
病軀常懶歩　　病軀（びょうく）　常に　懶出（らいしゅつ）するを
幽事頓忘疲　　幽事　頓（とみ）に　疲を忘る
石腹青將滴　　石腹青く　将に滴（した）たらんとす
峯皺翠更滋　　峯皺（ほうしゅう）の翠　更に滋し
澗沙泥不滑　　澗沙（かんしゃ）の泥　滑らず
傘屐好追随　　傘屐（さんげき）　追随を好とす

甘雨　ほどよい時に降る雨。期　約束して会う。艱　むずかしい、苦しむ。幽事　奥深くてもの静かなさま。　峰皺　山が重なったさま、山並み。屐　はきもの、下駄。

（大意）

恵の雨が降るひなびた村の路を登る。名のあるお寺から鄭重なお招きがあった。病がちで日頃歩くにも難儀をしているのに、詩会が楽しみで道すがらのしじまに疲れを忘れてしまうほどだ。岩肌に張りついた青苔から

雫が滴り落ちており、山並みの翠は一層濃さを増している。谷川に沿った小径は、滑る心配もない。傘を差し下駄を履いて案内の者についていくのもいいものだ。

この書が次の写真である。文末に「上廣山寺途中作」とある。

この作品は所在不明なのが悔やまれる。しかし、日記とも適合しているので、茶山が廣山寺への途中で詠んだ詩であるとしてもいいだろう。なお、遺稿集では詩題が「中條山中　赴黄龍寺詩会」とある。

＊　圓通寺・廣山寺とも真言宗の寺院である。東中条から三谷に越す峠の手前の中腹に並んで建っている。

どちらのお寺の山号も「玄洞山」と称している。

廣山寺本堂

圓通寺全景

県道から見た二つの寺院

廣山寺について、福山市神辺民俗資料館のホームページに次のように紹介されている。

標高一二五mの山腹に位置し、唐に渡った弘法大師・空海が帰国後に建立したと伝えられ、その時、白檀（インドネシア原産の常緑高木）の木を刻み、本尊である地蔵菩薩を作り安置したとされています。

その後、盛衰を経て正応元（一二八八）年に讃岐国「善通寺」の僧侶・宥鑁（ゆうばん）が中興したとされ、この時宥鑁は、弘法大師の霊跡を慕い尾道「西国寺」府中「栄明寺」上下「法身院」を同時期に再興し、「廣山寺」とあわせて「備後四院」と称されました。

「水野記」によれば、「古来、讃州善通寺の僧・宥鑁の建立の地なり。古くは十二寺、寺領百五十貫あったが、天文年間（一五三二～一五五五年）に衰微して三寺となり、永禄六（一五六三）年に毛利氏から十五貫を寄進されるが、福島氏により没収された。」と記されています。

また、文明三（一四七一）年の古記録には「二ヶ寺七坊の末寺または塔頭（たっちゅう）（同一山内にある小寺院。大寺に所属する別坊）を有していた」ことが記されているそうです。

近年の開発で、周辺から鎌倉末期～南北朝時代頃のものと思われる多数の五輪塔を出土しています。昔は真言宗でも大覚寺派でしたが、現在は高野山に改派しています。

㈧ 文政六年（一八二三）の作

箱田道中　　黄葉夕陽村舎詩　遺三―四

經此山蹊歳幾回　　此の山渓を経ること　歳に幾回

毎將夜半始還來　　毎に夜半ならんとして　始めて還来る

行思往事停籃篫　　行く行く思う　往事籃篫を停めしを

數點流螢水竹隈　　数点の流螢　水竹の隈

蹊　道。　籃篫　かご。流螢　飛びゆく蛍火。

隈　水が岸に曲がり入っている所。

（大意）

この山合いの道を年に幾度往来することか。いつも夜半近くになってから家に帰ってくる。以前はよくここで駕籠を留めて星の降るような蛍火をめでたものだ。つくづく回想していると、水辺の竹藪の中から数匹の蛍が出て飛んで行った。

詩碑　箱田道中

【ちょっと休憩】

詩碑「箱田道中」の隣に石碑「箱田良助誕生の地」が建っている。良助は寛政二年（一七九〇）箱田村庄屋細川園右衛門の次男として生まれた。文化四年（一八〇七）江戸に出て伊能忠敬に入門。測量術を学ぶ。九州測量に参加した後、忠敬の筆頭内弟子として測量及び地図製作に尽力し、大日本沿海輿地全図完成に大きく寄与した。幕府艦隊を率いて函館五陵郭に立てこもった榎本武揚は良助の次男である。

茶山ポエムと茶山ポエム絵画

茶山の漢詩を子ども達にもわかりやすく翻訳した現代詩が「茶山ポエム」です。「ポエム絵画」とは、茶山ポエムを読んで浮かんだイメージを画いた絵画です。

茶山ポエム「夕日」

夕日沈んだ　空まだ赤い
田んぼの若苗萌え重なって
遠くで　雷　どこかで雨か
山のてっぺん　雲の中

中山善照 作

茶山ポエム絵画　「夕日」

原詩・・・42頁参照

所見

落日殘紅在　　落日　殘紅在り
新秧嫩翠重　　新秧　嫩翠　重なる
遥雷何處雨　　遥雷　何れの処の雨ぞ
雲没兩三峰　　雲は没する　両三峰

【仮説】松風館十勝は邸内及び山田谷一帯に設置された

松風館十勝はどのように配置されていたかについては不明である。

昭和十五年（一九四〇）猪原薫一氏が「深安郡中條村舊蹟探訪記」「松風館十勝」を『備後史談十六巻七号・第十号』で発表された。その中で

○　松風館は林泉をめぐらし、池亭を設け且邸内の十勝を定めていた。

○　池が邸の南西隅に在ったことを知り得た。而て松風館十勝は多く此の池邊に在ったらしい」としている。

平成十八年（二〇〇六）武田武美氏（山田地区在住、菅茶山顕彰会元理事、郷土史家）は、「松風館十勝碑林除幕式」の資料の中で、次のように研究成果を発表されていた。

> 「松風館十勝は屋敷内の池亭だけに設けられたものではなく、邸内と山田谷一帯の風雅な地に標識を設置したのではないか」。
> 理由として、河相家は庄屋職を務めながら酒造業を営んでいたことを考えると酒造場、米蔵、薪小屋、米つき場などの付属施設が必要なことから、客殿たる松風館に隣接する場所に大きな庭を配し、その中に十勝もの標識を建てるには狭すぎる土地である。

また、『西中條村史』に「邸内假山ノ内十勝石碑アリシ」とあることから武田武美氏の遺稿を基に、菅茶山や松風館を訪れた文人たちの詩歌、文献や古老からの聞き取りを行い検証を試みた。

一　詩や文献より推察する

㈠　詩

㊀「松風館卽事」『黄葉夕陽村舍詩』　後一―二十一

○養魚場　○鹿の飼育　○玄関先まで乗り付ける

㊁「河相保之松風館同菅禮卿賦」　頼春水の詩

○澗から引き込んだ泉水が流れる　○柑橘系の樹

㊂「松風館即事」　『黄葉夕陽村舍詩』　前三―十五

○松や樟の木々　○竹林

㊃「中秋飲河相君推宅」　『黄葉夕陽村舍詩』　前二―十八

○月見の宴

㊄「河相君推宅即事」　西山拙斎の詩

○松の姿が池に浮かぶ　○苔がはえる庭

㊅「松風館」　『黄葉夕陽村舍詩』　前四―二十四

○穀物倉庫が隣接　○池亭

㈡　衝立から

○「松風館」「棣棠橋」「鳥語澗」「鳴玉橋」の方位を示す四角柱が建てられていた

○「迎碧墩」は「鳥語澗の北岸に刻立す」とある

㈢　文献『西中條村史』

○「邸内假山ノ内十勝石碑アリシ」としている。

二　地籍図（明治初期）と現地調査、古老からの聞き取りで推察する

○　象山献燈の東側に邸内を通る道があり、奥の方に良質な水が出る井戸と大量の炭などが出土した場所があり、酒造場と推察される。

○　昭和十五年に所有地上部の畑が灌漑対策用池となり新池（山田新池）と呼ばれるようになる。（河相家墓地の横）

○　谷奥には大小三つの池があったが、すべて埋められて現在は運動広場となっている。

○　山田谷に通じる道沿いに「でえやしき」（備後なまり土居屋敷）と呼ばれる大きな屋敷跡があった。

三　十勝の位置を推定する

㈠　酒造場と案内標識「四勝標柱」

象山献燈東側の通路は明治初期の地籍図にもあり、君推の時代から存在していたと考えた。武田武美氏は「その道を進んだ奥に井戸があり、大量の炭も発見されたのでその付近を酒造場」と推定している。

衝立にある永富充国の書（棣棠橋・鳥語澗・松風館・鳴玉橋）からするとこの酒造場付近に「四勝標柱」が建てられていたと推定されている。

「以て其方なるを知る也」とするに一番都合のいい場所であると。

㈡　松風館十勝を推定する

㈠「松風館」は象山献燈の奥側（北側）に建つ。

古老の話では「跡地の南西隅に池が存在していたと聞いた」（『備後史談十六巻七号』）とあり、跡地の南西部に池を配置した庭園や東屋があり、その周囲に松や樟、竹林をはじめ柑橘系の花木も植えられていたと推定する。

「松風館」
象山献燈の北側に

㈡「棣棠橋」は「四勝標柱」から西方か北西方向にあったと考えられる。

松浦正明氏は『菅茶山顕彰会会報十六号』で、「棣」はニワウメ、「棠」　はヤマナシとされているが、「棣棠」は「山吹の漢名」とある。（『新潮日本語漢字辞典・新潮社』）

また、菅波堅次氏も『神辺風土記㈠』の中で「山吹」としている。

その場所は案内標識「四勝標柱」からすると、西方にあったと考えられる。

「棣棠橋」（推定）

武田武美氏は、「河相家墓地旧入口（土居屋敷の北側）には谷の奥から小川が流れており、その付近には六十年前まで、山吹が綺麗な花を咲かせていた」と話し場所を推定していた。

『松風館記』には天野雅が「この地で曲水の宴でもてなされた」と記している。（『備後史談』十七巻三号）

この小川は上流のため池付近を源として、神社「大明神」、垂白棚の傍を流れ、「棣棠橋」に至る。河相君推は天野雅を橋の袂に誘い、筵を敷いて宴席にしたのであろう。現在は場所も荒れはてている。

㈢「垂白棚」は枝垂れ藤が咲き誇る場所で「棣棠橋」の奥にあった。

河相家墓地旧入口（今は消滅）を過ぎ「大明神社」がある手前付近であろう。　現在は荒れ果てた小径となり周辺一帯は耕作放置地となっているが、戦後しばらくは藤の花が一面にきれいな花を咲かしており、武田武美氏はこの場所を「垂白棚」と推定している。

㈣「紅於徑」は「棣棠橋」を過ぎ山田谷の奥へたどる山徑にあった。

昔は山道の両側に楓の木々が茂り、秋には見事な紅葉であったという。この辺りに「紅於徑」の石碑が建てられたと推定される。

㈤「浸翠池」は地域の運動広場となる。

ここが山田谷の最深部でかつては大小三つの池があり、一番大きい池の奥側には松の大木が枝を伸ばし、その影が湖面に映っていた。

この池には「ぬなは(じゅんさい)が生えていた。」また、「一番小さい池はなぜだか蒼い水を湛えていた」と武田武美氏は記している。

新池の完成後は放置されていたが現在は運動公園となっている。

㈥「迎碧墩」は山田谷の一番高い場所にあったと推定される。

「垂白棚」（推定）

「紅於徑」（推定）

武田武美氏は「松風館敷地の南東隅か南西隅にあった」としている。しかし、衝立の菅茶山の記文に「立於鳥語澗北岸」とあるので再検討した。「鳥語澗の北岸」ならば武田武美の推定には無理がある。

「碧」は「澄んだ空の色」「木々の青々とした色」「墩」は小高い丘とある。（『新潮日本語漢字辞典』）

小高い丘で遠く神辺平野を一望できる場所、木々の緑に囲まれた所とすると山田谷の一番高い場所、現在の新池になっている北岸付近であれば、茶山の記文とも一致する。新池は畑を掘り下げて造った池であり、ここからの眺望は「迎碧墩」の名にふさわしいと考える。

石碑「「迎碧墩」は新池造成時に「象山献燈」付近に移設され、さらに現在地（西中条親戚宅）に移されたのではないか。

迎碧墩（新池の奥と推定）

⑦「鳴玉橋」「鳥語澗」は松風館敷地東側に流れる山田川畔にあった。

案内標識「四勝標柱」からすると、「鳴玉橋」は南東方向に架かった橋と推定される。松風館跡地の東側には山田川が流れる。松風館跡地の南東部あたりの山田川にかかる橋であったろう。「鳥語澗」は案内標識「四勝標柱」では北東を指している。武田武美氏は現在の「新池」東側ではないかと推定されている。新池の東側は、雑木の山林が迫り、鶯やメジロなどの多くの鳥たちがさえずっていたことであろう。

鳴玉橋（推定）

鳥語澗（推定）

⑧「魚樂梁」は山田川に架かる「鳴玉橋」の少し上流部と考えられる。

山田川の傾斜は大きく、数カ所段差がある場所（通称ドンドン）がある。その落差を利用して養魚場としていたのではないかと思われる。

武田武美氏は四、五十年前までこの場所で竹の簀の子を張って、鯉を養殖していた人がいたと書き留めている。

その「ドンドン」下流部に竹の簀の子を設置して鯉や鮒を飼い、来客をもてなしていたのだろうか。

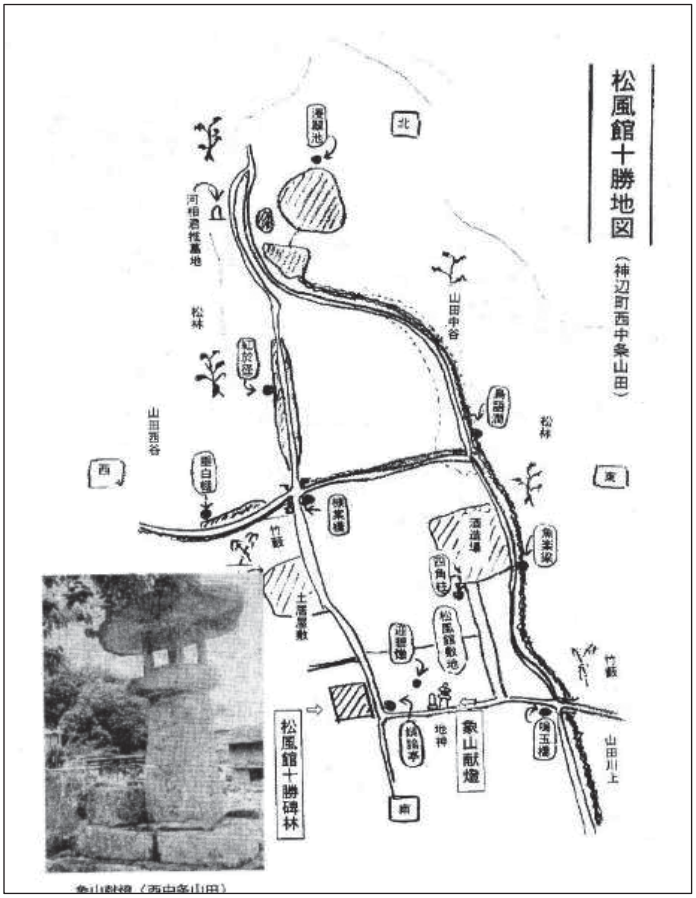
⑨「娯論亭」の位置ははっきりしない。

松風館に隣接した西南の場所に池を配置した庭園内に東屋を建て「娯論亭」としていたと武田武美氏は推定している。

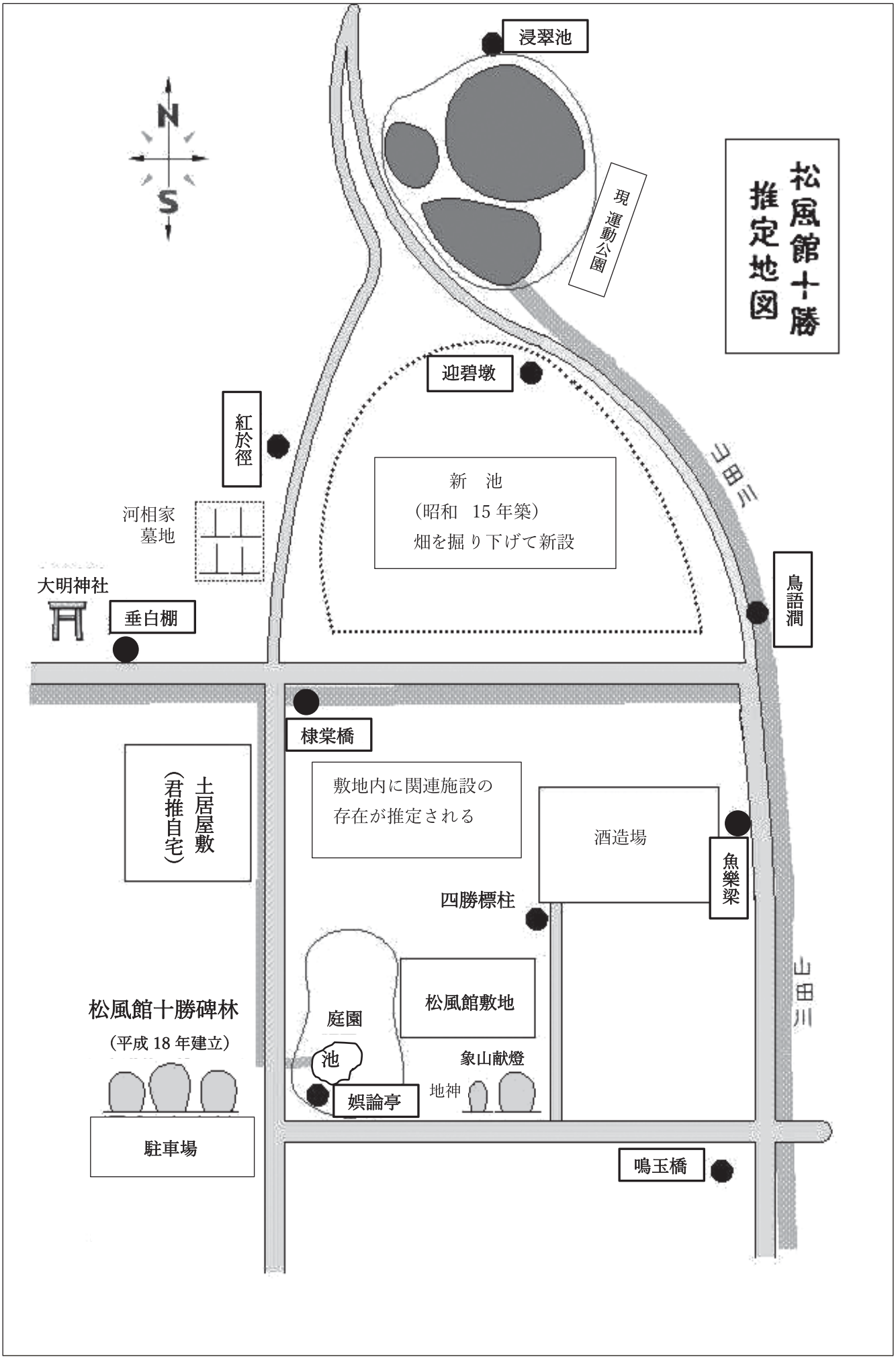
魚樂梁（推定）

四「松風館十勝推定地図」を描いてみる

武田武美氏の遺稿を基に検討し推定した。しかし、資料が少なく確定するに至っていない。また、茶山和歌「寛政四年松風館庭鳴玉橋」や茶山日記「享和三年三月二十五日 君推來謝転致四勝題字」の解明に至っていない。今後の取り組み課題としたい。



武田武美氏発表の松風館十勝地図


松風館十勝
推定地図
N
S
浸翠池
現
運動公園
迎碧墩
紅於徑
新　池
（昭和　15 年築）
畑を掘り下げて新設
河相家
墓地
大明神社
垂白棚
山田川
鳥語澗
棣棠橋
土居屋敷
（君推自宅）
敷地内に関連施設の
存在が推定される
酒造場
魚樂梁
四勝標柱
松風館敷地
庭園
池
娯論亭
象山献燈
地神
山田川
松風館十勝碑林
（平成 18 年建立）
駐車場
鳴玉橋